



菊水にあった家。現在は小野幌の開拓の村に移築して保存されている

農業にあこがれ札幌へ

有島武郎は明治11年(1878)に東京で生まれた。父の望みで学習院中等科に進学し、皇太子の学友にも選ばれるほどの恵まれた家庭だったが、武郎は上流階級や実業界を嫌い、農業にあこがれた。

札幌農学校行きを決意したのは生き方が異なる父から離れて自由に生きたかった面もあったといわれる。

明治29年(1896・18歳)、札幌農学校予科に編入学し、母方の伯父である札幌の新渡戸稲造教授宅に寄宿した。遠友夜学校の無給の講師として熱心に参加し、貧しく恵まれない人たちとの触れ合いで社会問題にめざめた。

アメリカ留学後再び札幌へ

明治34年(1901・23歳)農学校卒業のとき、日記に「我が真生命の生まれし故郷は札幌なりき」と、農学校の5年間で生き方に決定的な影響を与えたことを記したが、それほど、武郎青年には札幌の生活は大きな影響を与えた。

親友の森本とアメリカ留学の後、東北帝国大学農科大学(旧札幌農学校)から講師に招かれた。これには父の働きかけがあったようだが、武郎にも望むところだった。英語、倫理、社会問題、文学史などを担当し、清新な講話は学

生たちの人気を集め、名物教授となった。

結婚し白石のリンゴ園に住む

明治42年(1909・31歳)3月、親の勧めで陸軍少将の娘の神尾安子と結婚し、永山氏別邸そばの貸家と苗穂近くの貸家に短期間住み、上白石村2番地(今の菊水1条1丁目)に移った。43年には武者小路実篤、岩内の漁夫画家木田金次郎が来遊し、木田をモデルにした「生まれ出づる悩み」に当時住んでいた家に来訪したことを書いている。

「私が君に始めて会ったのは、私がまだ札幌に住んでゐる頃だつた。私の借りた家は札幌の町端れを流れる豊平川といふ川の右岸にあつた。その家は堤の下の1町歩程もある大きな林檎園の中に建てゝあつた。」

この家は、新婚生活を営み、子供が生まれ、思想的な問題から警察に監視され、本格的に文学への道に傾斜していくことになったなど、有島にとって最も濃密な生活を送った場所だった。豊平川を題材とした「幻想」や「或る女のグリンプス」を発表し、本格的に文学の道に進んでいった。

妻安子の病気でやむなく東京へ

札幌永住を決意し、大正2年に自ら設計した北12条西3丁目の新居(現在は

有島武郎は札幌をこよなく愛し、白石では林檎園の中の家に住んだ





菊水1条1丁目の住居跡。木は建物を撤去する前のまま立っている

南区の芸術の森に保存)に引っ越した。自ら設計し、生涯住むことを決意した家だったようだ。しかし、大正3年(1914・36歳)9月、死の病とされていた肺結核で安子が倒れ、市立札幌病院に入院の後、一家をあげて帰京した。予期せぬ札幌生活の終止符だった。

大正5年に安子(28歳)を失い、同じ年に父(75歳)も失った。

以後、有島は文学に打ち込み、「惜しみなく愛は奪ふ」「カインの末裔」「生れ出づる悩み」などの名作を次々に発表した。



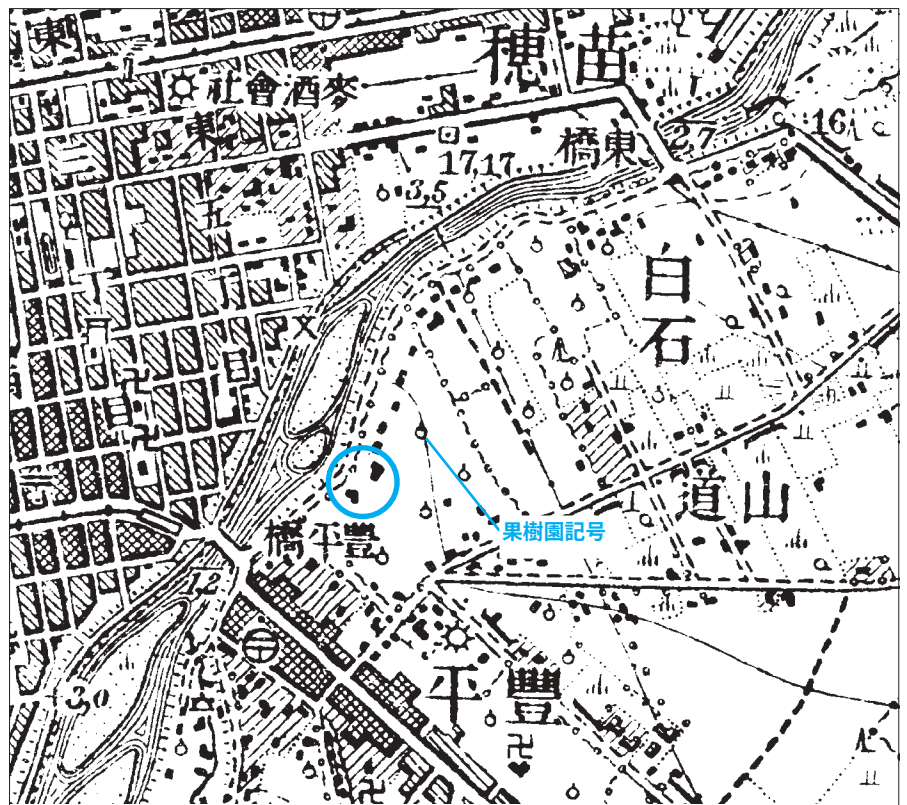
有島武郎

農地解放と死

大正11年(1922)、父が武郎の将来のために買った狩太(今のニセコ町)の農場を小作人に無償で解放した。武郎

は若いころから小作人からの収奪を嫌っており、父の死を機会にやめることができたのだ。

(中西哲男)



大正5年の5万分の1地形図(部分拡大)。有島武郎が住んだ家はこの辺にあった